

中学校「ナガサキ原爆写真展」5年目

Foot print
フットプリント

写真資料
調査部会発行
H26.8.9

2014年
第15号

純心中・高校、長与・高田中で開催

写真資料調査部会が毎年開催する「校内原爆写真展」は、今年で五年目を迎えました。今年は六月三十日から七月四日まで純心中学・高校で、七月七日から十八日まで長与町立高田中学校で開催しました。



純心中学・純心女子高等学校



長与町立高田中学校

定された「登録記念物」四か所の被爆前後、現在の写真等です。

純心中学・高校は戦前から現在と同じ場所であり、六十九年前は「純心高等女学校」という校名でした。当時純心の生徒は、学校の向いにあった三菱長崎造船所大橋部品工場（現在の岩屋橋交差

点一帯）に学徒動員として働いていましたが、原爆により学校は全壊全焼、工場や自宅で生徒や職員合わせて二一三人が亡くなりました。

平成二十五年四月には五階建ての新校舎が完成、写真展はこの新校舎二階で開催、学校のホームページにも掲載されました。

「長崎平和推進協会 写真資料調査部会」による長崎原爆写真展が、本校で行われています。展示作業では、高校写真部の生徒がお手伝いしました。純心と関わり深い資料を中心に、大変貴重な写真が沢山展示されています。

八月の長崎原爆の日前に、原爆による惨禍に目を向け、平和への願いを新たにしましょう。」

写真展終了後、校長、教頭、平和担当の各先生から、「生徒たちは改めて原爆の悲惨さを感じ、平和につい

て新たに考える機会になったようです。来年も開催していただきたいですね。」とお礼の言葉をいただきました。

長与町立高田中学校は平成八年開校、JR道ノ尾駅に近い中学校です。ここでも生徒たちと共に、会場の玄関ロビーで展示作業を行いました。手伝った生徒たちは「原爆は自分たちとは無関係と思っていたが、この学校周辺でもこんな出来事があったとは」と驚いていました。写真展を見た一年生は滑石地区等、学校周辺の被爆遺構を見学したそうです。

原爆投下時、近くの長与国民学校高田分校（現在・長与町立高田小学校）は、被災者の救護所となりましたが、当時の記録は殆ど残っていません。被爆翌日この分校に避難したのが、被爆

詩人として知られる福田須

磨子さんです。浜口町の自宅は壊滅、両親と長姉の三人が爆死しました。その悲惨な体験を後年「われなお生きてあり」に著しました。姉の豊後レイコさんのご好意で写真やその一部を展示しました。

校内原爆写真展は、数年前深堀部会長と、「四千点余りの原爆関連写真を保存するだけでなく、活用する方法を考えよう。県内の中・高校生に見てもらおう。」と話し合っただけが始まりです。当初は校内で開催できるかどうか不安もありましたが、最近は学校関係者の理解も得られ、ホームページでの告知や、「来年も開催して欲しい」の声が聞けるようになりました。

なお開催する学校は、写真資料調査部会が毎年任意で選んでいます。
(写真資料調査部会・堀田武弘)



写真展 高田中学生徒たちが感じたこと

高田中学校では写真展終了後、生徒たちが平和担当の先生の指導で感想文を書きました。その中からいくつかを紹介します。(学校との約束により生徒の氏名は表示しません。)

初めて知った救護所だった

高田小のこと

3年 女子

私の学校で開催された「ナガサキ原爆写真展」を見て、真っ先に感じたのは原爆の恐ろしさです。私はもともと小学校から中学校までを通



写真の説明を聞く純心女子高校生



写真の説明を聞く高田中学校

して、平和学習や長崎原爆資料館などの見学から、原爆の恐ろしさについてはよく分かっているつもりでした。しかし今度の写真展を見て、私が最も印象に残っているのは母校である高田小学校のことです。福田須磨子さんの小説「われなお生きてあり」の中の高田小の部分が抜すいされ、その時の校内の様子や被爆し傷ついた方々の心境が細かく書いてありました。今では小学生たちが走り回っているグラウンドや、明る

い話し声が聞こえる校舎が、かつて被爆者であふれかえっていたことは、すぐには想像できませんでした。しかし私にとっては母校であるからこそ、その状況を身近に感じ、とても心に残りました。もう一つは原爆投下前と投下後を書した長崎の街の比較した写真です。この写真から原爆の威力を感じました。投下されるまでは、普通に家や工場が建ち並んでいたのに、投下された後には、どこに何が建っていたのかもわからないくらいに、一掃されているのがとても印象に残りました。この写真展で新たに学ぶことが多かったです。先日あったような、修学旅行生が被爆者に対して差別の言葉をあびせた人、また差別の気持ちを持つ人に、「自分たちが住んでいる日本で起こったことだから、決して無関係ではない」ということを語り継いでいきたいです。

僕たちが次の世代に

原爆のことを伝えなければ

3年 男子

校内原爆写真展を見て原爆への関心や核兵器の恐ろしさが今までより強くなりました。たとえば今、高田中学校が建っている近くに、昔は分校だった高田小学校があったということは今全く知らなかったけれど、写真を見てこんな時代があったんだと興味がわきました。

本当に戦争や原爆を

くりかえしてはいけない

3年 女子

多くの写真や資料が展示されていて見ましたが、それを見てたくさんさんの罪もない何百人、何千人、何万人の命を瞬時に奪ってしまう核兵器が、現在も世界の中に存在すると思うと、こわくてこわくてしかたがありません。たとえば私の家族や友達がそんなものに殺されてしまい一人ぼっちになると思うと、家族や友達がいることは当たり前のように思っていた自分が、心を改めて、もっと大切にしなければいけないと思いました。最近の新聞に生き残っている被爆者が二十万人を切ったという記事を読みました。いつかはこの人たちがいなくなることを思うと、僕たちが次の世代に原爆のことを伝えていかなければいけないことを感じました。長崎平和推進協会のみなさん、本当にありがとうございました。

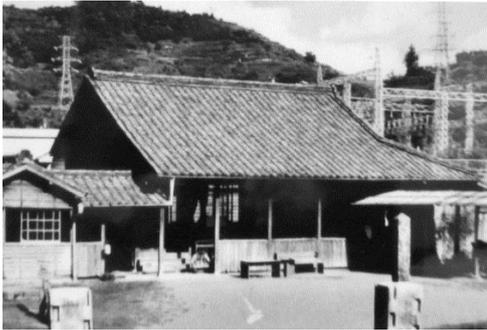
展示してある写真を最初に見たときは「うわっ！」と思いました。きのこ雲なんかは今までに何度も見たことはあったけど、校内に展示されている写真を見てとてもこわくなりました。戦争や原爆はむごいもので、絶対にしてはいけないと習ってきましたが、本当に戦争や原爆をくりかえしてはいけないと確信しました。原爆でたくさんの方が亡くなり、その後も放射線などで苦しめられている人たちがかわいそうでした。



原爆で廃墟となった道ノ尾一带



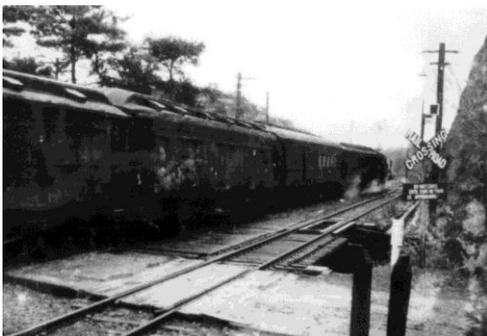
高田小が建つ前の百合野(写真提供:九州電力)



高田小学校の分校時代の校舎



昔も今も変わらない道ノ尾駅



戦後の道ノ尾駅岩屋踏切 標識は英文表示

写真の中には高田小(分校)の写真もあり、昔はこうだったんだと見入ってしまった。原爆が落とされた時、高田小にはたたくさんの人が運ばれてきて、包帯などもみんな使いまわして使っていたと知ってびっくりしたし、正直言つて少し汚いなあと思いました。でも当時の人は、どんなことにもぜいたくを言わず、「生きていられるだけでも幸せ」と、言っていたことを知りました。今の私たちは、わがままを言い過ぎていのではないかと反省させられます。

僕たち世代が原爆を伝える

3年 男子

校内で開かれた「ナガサキ原爆写真展」は、ぼくにいろいろな事を教えてくれました。展示された写真や資料を見て、また展示に来てくださった長崎平和推進協会の人の話を聞き、驚きと戦争の悲しさがとても心にしみました。展示された大ききこの雲の写った写真がありました。きのこ雲の下にいた人は何人かを除き全員亡くなったことを聞いて驚きました。「どれほどの熱さだったのだろう」「どれくらいいまぶしかった

のだろう」と思いました。

原爆の熱さは鉄が溶ける熱さより、ずっと熱いということを知りました。ぼくたちの世代が、これから多くの人に原爆の恐ろしさ、悲しさを伝えて、二度とこのようなことが起こらないようにしたいです。

写真展を見て被爆遺構を

訪ねる

1年 男子

僕は校内原爆写真展を見て、原爆は長崎に落とされただけでなく、僕らが住んでいる長与も無関係ではないことがわかりました。

僕たちはこの写真展を見

た後、七月十一日に学校周辺にある被爆遺構を見に行きました。滑石の「宮島軍医救護所跡」や「被爆くすのき」、「道ノ尾駅」にも行きました。「宮島軍医救護所跡」は当時の建物等は残っていませんでしたが、説明の看板があつて、その時の大変さだった様子がわかりました。「被爆くすのき」の根元の部分は原爆の影響を受けたのか穴が開いており、コンクリートでふさいでありました。「道ノ尾駅」での出来事も先生に教えてもらいました。

ぼくたち中学生も学校で

開かれた原爆写真展から学ぶことはたくさんあり、いい

平和学習になりました。二週間の写真展はとてもいい企画をありがとうございました。

体験談を聞き写真を見る

3年 男子

来年は原子爆弾投下から七十年となります。小学生で被爆した人も、もう七十五才から八十才と高齢化がひどく進んでいます。平和な世界を保つていくために体験談を聞くことは大切ですが、写真なども訴えていくために大事だと思います。

二つの中学写真展で展示した資料より

やつと道ノ尾の

高田分校校庭に…

福田須磨子

眠れぬ夜を壕で明かした。…道ノ尾の長与小学校分校（＊現在の町立高田小学校）に移すことに相談が決まっていた。…

やつと道ノ尾の長与小学校の校庭のそばにきた。一歩入るとここにもまた地獄絵図が展開されていた。校庭にはテントもなく重傷者がむしろの上にひしめき合うように寝かさされ、うなりつづけているのだ。講堂の板の間には、誰がどこから見



著書「われなお生きてあり」 福田須磨子さん



つけて来たのか、ま新しいいむしろを敷いて、負傷者が二列にずらっと並んで寝ている。私たちは空いているむしろの上に坐った、新しいむしろの感触が疲れたはだしにこころよい。救急袋から握り飯を出した。あれほど歩きまわり、空腹なのに私たちは全然食欲も失っていた。ちよつと休んだ私と友人は、すぐに負傷者の看護にとりかかった。治療といっても赤チンキを塗るだけである。

包帯（ほうたい）には膿（うみ）がくつつついている。それをバリツとはがす。ただれた皮膚に、ベタベタと赤チンキを塗る。別にハエが飛んでいるわけではないのに、どうしてだろう、包帯にも傷にもいつの間にか蛆（うじ）がウジヤウジヤとうごめいている。汚れた包帯はバケツ二つにギューギュー押しこんでも山のようになる。それを下げて、学校近くの小川に行く。小川の水は澄んでいて冷た

く気持ちがいい。私はたんに包帯を洗う。時々、上空を敵機が通りすぎる。そのたびにはげしい恐怖が私を襲う。…

「われなお生きてあり」より

「純女学徒隊」生きながら焼け死んでいった娘たち

江角 ヤス

（当時・長崎純心高等女学校校長）

戦争はいよゝ激しくなり、学校は授業をやめ生徒たちは軍需工場で働くことになった。

朝四時半に起きて、

「聖母よ 日本を勝たしめ給え。天上の御母聖マリア、



悲劇を伝える殉難の記録



江角ヤス校長

罪人なる我等のために、今も臨終の時も祈り給え」と祈りながら、浦上天主堂まで毎朝ごミサに行つた。作業服に白い鉢巻、「純女学徒隊」の腕章凜々しく、ご真影奉安殿の前に参列して、「行ってまいります」と校長に挨拶し、

「学徒隊の歌」

花も蕾の若桜

五尺の命ひっさげて

国の大事に殉ずるは

われら学徒の本分ぞ

あゝ紅の血はもゆる

をうたいながら工場に向

かう。兵器の部品工場であ

つたので、旋盤の機械がた

くさんならんでいた。今の

ように毛糸のジャケットが

あるわけではない。うすい

作業服の下には、継ぎのあ

たった下着で、寒々とした

いでたちで、火の気のない、

吹き通しの工場で、冷たい

旋盤（せんばん）にむかつて

鉄片をけずる。

ベルトに巻かれる危険が多

いので手袋は一切はめられ

れない。しもやけでふくれ

た手は油ずんで、見るからに痛々しい。作業がすんでも手を洗うのに石鹸があるわけではなし、ましてお湯がでるわけでもない。やつと寄宿舎に帰って来ても、一日二合三勺の配給米、大根や芋の茎まで食べても足りない。

生徒たちはいじらしく言う。…私たちが頑張らねば、お国はどうなりますかと二言目には言う。この生徒たちが大きくなったら、日本の国はどんなに栄えるであろうかと、つくづく感心していた。どの生徒もどの生徒も頭が下がる娘たちばかり。

ああ、それなのに水一杯ももらわず、生きながら焼けて死んでゆかれたとは…。（純女学徒隊殉難の

記録）より

